

言語観比較における生成文法擁護の可能性について

松本 智大

人間の言語獲得について、成長過程の中で学習していくという経験主義的な説明では理解し難い点が数多く存在する。完全ではない文が刺激として与えられるにも関わらずほぼ完全な文法規則を獲得することなどがその例である。チョムスキーによれば言語は生得的であり、人間の身体器官と同様に心的器官として備え付けられたものだと言う。本研究では発達心理学における実験を参照し、チョムスキーの理論を擁護しうる可能性を追究した。その際にまず、現代における言語学の展開を知るために 20 世紀での言語学史の概観を行った。次にチョムスキーの思想、特に言語観を確認し、それと共にチョムスキーの理論に批判的である認知言語学の立場からの反論等を整理した。そして最終的に、発達心理学における実験の結果などを参考にし、他の言語観との比較も交えながらチョムスキーの理論に対する擁護可能性を探った。

発達心理学の実験からは第一、第二言語問わず年齢が進んでいくにつれて学習に支障をきたす要因が存在している可能性が示された。幼児が経験によって言語を獲得しているという立場からこの結果を捉えると、第一次成長を終え身体的に成熟した後の方が学習能力は高いように思われるが、それとは反する結果が現れていることになる。一方で、チョムスキーの立場からは、生得的に有している普遍文法が生後に様々な言語刺激を受けることによってパラメータが個別言語に移行していき、最終的に個別言語の文法に至る、と考えられる。第二言語の習得に関しても言語獲得における普遍文法のパラメータが、個別言語に決定された後では他言語の言語刺激があっても第一言語習得のような活発な受容はできない、と説明することができる。

チョムスキーは経験主義、行動主義的な論に何度も批判を行っているが、それらが完全に言語獲得の謎を解明するに至らない、と主張しているわけではない。一人の人間が自らの言語を社会にふさわしい形式にしていく過程は、行動主義で言うところの〈刺激-反応〉モデルとも言い換えることが可能である。チョムスキーが主張したのは経験主義・行動主義では説明に不都合が生じるような側面の存在であり、必要性を求めたのはそれらを乗り越えるためのより具体的な補足である。また、チョムスキーの理論はあくまで仮説であり決定的な証拠が示されてはいない。しかし、本研究では発達心理学の実験を参照し、経験を重んじる立場からは説明が難しい点の存在が確認された。したがって、言語獲得を論じるにおいてはチョムスキーの理論を使用した方が適切である、という結論に至った。

(指導教員 横山幹子)